

The front hospital

ザ フロント ホスピタル

医療法人社団 英明会
大西脳神経外科病院

兵庫県明石市

脳神経外科領域の基幹病院として 救急から回復期をカバー

2000年、兵庫県明石市で開院した医療法人社団英明会大西脳神経外科病院。「民間病院でもトップレベルの医療を提供する」という方針で、東播磨医療圏における脳神経外科領域の救急疾患を中心に対応してきた。17年には、回復期リハビリテーション病床を増床。救急から回復期までをカバーする病院として存在感を増している。

母の交通事故をきっかけに、 脳神経外科医療が希薄な地域に開院

「1981年、母が地元の加古川市で交通事故に遭いました。急性硬膜外血腫でしたが、加古川市にも明石市にも対応できる病院がなく、西宮市の兵庫医科大学病院まで運ぶという連絡が入り、それを聞いて、1時間以上も搬送にかかったら死んでしまうと思いました。何とか加古川市民病院の知り合いにお願いして助けてもらったんです」と大西英之理事長は振り返る。

当時、診療科を数多く抱える大病院は予定手術が詰まっておられ、脳卒中等の救急搬送でも迅速に対応できなかった。その後、2000年ごろには、t-PA(血栓溶解療法)や血管内手術の技術など、脳神経外科領域のレベルは高くなっていたが、各診療科が予定手術を入れている中で、脳神経領域の救急に理解を示し、優先してもらうことは難しかったという。

「脳疾患は、『タイムイズブレイン』といわれるように、時間の経過が脳機能の損失に直結することは周知されています。t-PAなど学問的には進んでいるのに、救急の受け入れ体制が整っていないためにうまく実践できていないというギャップがあり、良い医療とは何だろうかと考えるようになりました。助かる患者さんを助けられないことに忸怩たる思いが

あり、脳神経外科医療が希薄なこの地で開業することになりました。当時、54歳。一般的には遅いと言われるでしょうが、自分が思う良い医療を実践したいと決意しました」。

24時間、365日、救急対応できる病院にしたいと思い、2000年12月に4人医師体制、82床で開院。MRIや血管造影を取り入れ、当時から血管内治療などもできるよう設備を整えた。



「地域で脳神経外科の医療をきちんと実践することが目標」と語る大西英之理事長。

開院から1年目の外来患者は1日平均100人で、2年目には200人に増加。救急搬送は当初から、年間900人を超え、救急隊からは患者さんを受け入れてくれるところが出来て喜ばれたほか、助けられる命が増えたことで交通死亡事故としての件数が減少したため、警察にも感謝されたという。

現在は、常勤の脳神経外科医12人、麻酔科医2人に加え、非常勤医12人体制でのぞむ。救急搬送は年間2200人と、単科病院としては驚異的な件数を受け入れている。手術件数は877件で神戸市立医療センター中央市民病院と肩を並べており、県内で欠かせない存在となっている。

救急から回復期までを カバーするため、新病棟を増築

同院は2013年、地域に急性期病床が不足していることから、一般病床を122床に増床し、新病棟を開設した。17年には、回復期リハビリテーション病床を31床増床。救急から回復期まで一貫して支える体制にしたことで、後遺症の軽減を図っていく考えだ。

「新病棟の開設により、手術室を4室設けました。以前は1室だったため、一つの手術が終わったら次という具合で、同時進行の手術はできませんでした。4室になったことで、手術しながらも常に救急を受けられる仕組みになりました。また、手術室とMRI室をつなぎ、術中MRIが可能となったほか、脳血管撮影装置を導入したハイブリッド手術室を新設し、最先端の脳血管内治療ができるようになりました。マンパワーも増やしており、救急、急性期が充実できました」と胸を張る。

また、回復期リハビリテーションセンターについては「急性期の入院期間は2週間が標準的になっていますが、脳卒中は、すべての人が2週間でリハビリに行けるほど元気になるわけではありません。重症の人は1カ月も2カ月もかかり、急性期を脱しても急性期の医療を必要とする状態の人もいらっしゃいます。そのような患者さんの治療成績の悪化を防ぐため、脳疾患の知識があり、急性期医療にも対応できる当院でリハビリを提供したいと県にアピールし、やっと31床の増床が認められました。当院が急性期後すぐのリハビリを行うことで、次の段階のリハビリや療養期の病院も、患者さんの支援がしやすくなるのではないかと思います。また、脳卒中になって助かる人は増えていますが、発症後に嚥下機能の低下によって誤嚥性肺炎を引き起こすケースが急性期に多



新病棟建設により、手術室は4室になった。



手術室とMRI室をつなぎ、術中MRI検査にも対応している。



検査中の緊張を和らげるため、壁に樹木が描かれているMRI室。

く見られます。当院では、術後すぐから言語聴覚士や理学療法士、栄養士など多職種のスタッフにより肺炎の予防策に取り組んでいます。肺炎の合併率は全国平均で20~30%程度ですが、当院では10%未満と、数字でも効果が表れています」と語る。

大西理事長は「自院を開業するに当たり、長い間培ってきた大学病院での経験を生かし、『民間病院でも、医療レベルはいつもトップレベルであり続けなければいけない』と思い、そのことを職員にも徹底してきました。民間病院の在り方としては、小回りの利く実際の医療を提供することだと思います。『施す、施される』ではなく、医療者と患者は対等の立場で、病気に立ち向かっていくことが大切です」と語る。そして職員には、交通費や宿泊費、参加費などを病院が負担し、学会や講習会等への参加を促すほか、副院長や事務長などのマネジメント層には、トップリーダーとしての考え方を学ぶ研修を必須にし人材育成にも力を注いでいる。

医療に対する大西理事長の姿勢は、脳神経外科医の中でも評価が高く、米国ベストドクターズ社が医師同士の調査で選出するベストドクターに、2008年から6回連続で選ばれ

ている。また、ティーバック社よりドクターオブドクターズネットワークの優秀専門臨床医として2回の認定を受けている。推薦基準は「自身や家族が入院や手術が必要となったときにお願いしたい」「人間味豊かで患者の立場に立った治療を行える」など。

大西理事長は「チームで疾患にアプローチするという姿勢が評価されたのではないのでしょうか。職員は地域で自分たちが何をしなければいけないか理解していますし、普段の取り組みにも表れています」と、病院全体の評価だととらえている。



2017年、回復期リハビリテーション病棟31床を新設。



急性期後で医療度の高い脳疾患患者のリハビリにも力を注いでいる。



屋上の庭園も患者さんにとっては心地よいリハビリスペース。



脳血管撮影装置を導入したハイブリッド手術室。



患者さんの状態を画像で確認しながら手術を行う。

地域の子もたちやネパールを対象に医療者の育成にも取り組む

同院は開業以来、「民間病院でも、きちんとした医療を提供している」ことを地域に知らせるために、年報を発行するほか、病院指標を開示している。また、患者さん向け、医療機関向けにそれぞれ広報誌を作成し、それぞれに適した情報を提供。地域医療連携室が中心となり、年2回市民公開講座を行うなど、地域の健康支援にも力を注いでいる。

子どもたちを対象に、医療に興味を持ってもらう取り組みも行っている。夏休みの終わりにオープンホスピタルを開催し、院内見学を実施。医師や看護師等が働いている様子や模擬手術を見学することで、テレビで見るものとは異なる本物を感じてもらうのが目的だ。また、高校生の進路指導も受け入れており、医療者を志す人が増えることを期待している。

また、山を愛する大西理事長が足繁くネパールを訪れていたことが縁で、同地の脳外科医の留学も受け入れている。5年前から毎年ネパールの研修医を受け入れたり、大西理事長らが現地を訪れ、手術指導や講演なども行っている。

今後の課題について大西理事長は「学問が進歩し、ただ助けるだけの手術から侵襲の少ない手術や後遺症の少ない手術へと変わってきています。脳血管内手術においても、新たな器具の導入や技術の進歩が図られています。また、ナビゲーション手術やシミュレーションなど、コンピューターの支援技術も進んでいます。開頭手術の場合、ブレインシフト(開頭後、脳脊髄液が減ることで脳が沈み込む現象)が起こるため、当院ではその状態でMRIを撮り、もう一度ナビゲーションし直す技術を取り入れており、治療の精度向上を実感しています。今後も、これらの技術を活用し、この地域で脳神経外科の医療をきちんと実践していくことが目標です。引き続き最善の治療をしていくことを続けてまいります」と気を引き締める。



地域医療連携室のスタッフを中心に市民公開講座を企画し、地域住民の健康意識向上を図っている。



子どもたちが対象のオープンホスピタル。次代の医療者育成を目指している。



ネパールからの医師留学生を複数名受け入れ、国際貢献している。

hospital data



医療法人社団 英明会 大西脳神経外科病院

〒674-0064
兵庫県明石市大久保町江井島1661-1
TEL: 078-938-1238
<http://www.onc.akashi.hyogo.jp/>

■診療科目: 脳神経外科、神経内科、放射線科、麻酔科、
リハビリテーション科
■病床数: 153床